Bellmare VICTORY !

2013.1.20 発行 Vol.56

「VICTORY ！」は、『湘南ベルマーレ』というＪリーグクラブのホームタウンに住むみなさんに、
サッカーを通じてより多くの人とふれあい、地域への思いを深め、スポーツの楽しさを体感していただきたい、
そんな願いを込めてＡＳＡがお届けする情報紙です。

企画・制作 / 株式会社 朝日新聞経営研究センター　　協力 / 株式会社 湘南ベルマーレ

経験を重ねるほど面白くなる。ビーチバレーは生涯スポーツ

NPO 法人湘南ベルマーレスポーツクラブのビーチバレーチームに所属する白鳥勝浩選手。2008 年北京オリンピックでは、日本ビーチバレー男子史上初の勝利を挙げ、2012 年ロンドンオリンピックにも連続出場。国内ではビーチバレージャパン 10 連覇の偉業を成し遂げています。平塚を拠点に活動する白鳥選手にビーチバレーの魅力、今後の活動について聞きました。

ビーチバレー
北京・ロンドン五輪日本代表

白鳥 勝浩

Katsuhiro　SHIRATOIRI

インドアからビーチバレーに転向

----- 大学までは６人制インドアのバレーボール選手だった白鳥選手ですが、ビーチバレーに転向することになったきっかけはなんですか？

「転向のきっかけになったのは、ビーチバレーの大学選手権という大会です。インドアのときはセンターで、速攻や移動攻撃、ブロックなどをするポジションでした。ラリーが続いても１度もボールに触れないでポイントが決まってしまうことさえある６人制に比べ、ビーチバレーは１回のラリーで最低でも１度は必ずボールに触れるので、自分のプレーがそのまま試合の勝敗を左右します。試合中は監督もコーチも選手に指示を出すことができないので、すべて自分たちで作戦をたてる。そんなビーチバレーの面白さ、手応えが僕の目指すところと一致して、転向に踏み切ったのです」

インドアバレーボールとの違い

--- 同じバレーボールでも、プレーする上でインドアとの違いはなんでしょう。

「体育館の中で行う６人制とちがって、屋外の砂の上でプレーすること。これが一番わかりやすい違いでしょう。インドアから転向した選手が、もっとも苦労するのはボールがコントロールできなくなる『風』。それ以外にも屋外であるがゆえに、暑さ、寒さ、雨など不安定で厳しい自然環境に対処しなければならないのが、インドアにはないビーチバレーの難しさです。また選手は２人だけで交代が効かないので、どちらが欠けても試合が成り立たない過酷なスポーツです。

さきほど監督は選手に指示ができないという話をしましたが、拍手をすることさえ許されません。なにか合図を送っているように誤解されるからです。ゲームが始まったらパートナーと２人だけ。自分のことはもちろんパートナーの調子、対戦相手の様子、試合の流れを見ながらプレーします。

そんなビーチバレーに魅力を感じながらも、最初はその面白さを十分に理解できていなかったかもしれません。経験を重ねていくうちにその奥深さがわかってきました。

それに加えてメンタルがとくに重要なスポーツなのです。言葉は悪いですが、ダメな方の選手が一方的に狙われる。1・2・3 と交代で打つので、3 本目のスパイクが弱い選手が徹底してサーブで狙われるんです。それはもう容赦ない。

それで失点を重ねていくと、気持ちはどんどん落ち込むし、応援してくれるお客さんに対しても、パートナーに対しても申し訳ない気持ちでいっぱいになって、最初はどうしていいかわからなくなります。それに打ち勝つメンタルを持っていないと強くなることはできません。反面、勝ったときは自分の力を発揮できた充実感、満足感でいっぱいになります」

--- お話しを聞いていると、ビーチバレーは長く経験を積んでいる選手に有利なスポーツのようですね。

「まさにそうです。自然環境への対処のしかた、試合における戦略など、試合経験を積んでいる選手が強いんです。風が強いときはどのようにサーブを打ち、どんなトスを上げるかというのは、いろいろな状況で実績を積んできた選手の方がうまく対応できますね。だからプレーヤーの年齢層が、他のスポーツに比べて高いのでしょう。

年齢とともに体力は落ちていきますが、キャリアの長い選手は効率よく体力を使う方法を心得ています。ボールをすべて拾いにいくわけではなく、走る距離やジャンプのしかたなど、体力の消耗を最小限に抑えてテクニックを使い、勝負どころでポイントを稼ぐ。ベテランのやり方です。それに比べて若い選手はがむしゃらにボールを追いかけてしまう。僕も若いときは一生懸命動いているのに、そうでもない年上のチームの人たちに勝てないのが不思議でした。そういう若手と熟練者が対戦するゲームも、観ていると面白いですよ」

--- 砂の上でプレーすることの難しさは？

「砂のコートを使って裸足でプレーするのもビーチバレーならではですね。会場によって砂の質がちがい、その砂に合わせた身体の動かし方、足の踏み方をしなければなりません。砂の上で走ったりジャンプをすると、崩れて足が埋まってしまうと思うかもしれないけれど、踏み方によってキュッと止まる部分があるんです。そのコツをつかめば、ジャンプしたり切り返しを効かせたりもできるようになります。それでも、踏んでいると砂が崩れて地面にデコボコができるので、それを足で均らしながらプレーするんです。ブロックやスパイクを飛ぶときに、へこんだ場所で飛ぶと 5cm くらい低くなってしまいます。選手はみんな、合い間に足で砂を均すのが癖になっていますよ」

パートナーの存在

--- 北京、ロンドンのオリンピックに出場したときのパートナーは、インドアでも活躍された朝日健太郎さん（2012 シーズンをもって現役引退を表明）でした。パートナー選びはどのように行われるのでしょうか。

「パートナーを選ぶのは選手自身。簡単に言ってしまえば自分から営業をかけるんです。『僕はこういう選手ですけれど、組んでみませんか』という具合に。

僕の場合、ペアを選ぶ上での第一条件は目標の一致です。その選手とどんなに仲が良くても、お互い高い技術を持っていても強いチームになるとは限らない。でも目標が同じ相手とならば、嫌なことや難しいことがあっても共通の目標を達成するために、足並みをそろえて頑張れるんです。朝日さんとはオリンピック出場という目標が完全に一致したので、そこに向かって進むだけでした」

五輪出場・今後のビーチバレー

---2012 年のロンドンオリンピックを振り返っていただけますか。

「僕はオリンピック出場を目指してビーチバレーの世界に飛び込んだのですが、まさか２回も出場できるとは思っていませんでした。とくに昨年のロンドンでは、１万人を越える観客のひとりひとりがビーチバレーを心から楽しんで応援してくれました。そんな環境でプレーできたことは、代えがたい経験になりました。ロンドンで勝利することはできなかったのですが、それも決して無駄にしてはいけない。負けた悔しさ、世界の強さ、を後輩たちに伝えていくこと。また世界的に見た日本のビーチバレーの状況をビーチバレーに関わるすべての人たちにアピールし、今後の日本の課題を浮き彫りにすることもできた大会だったと思っています。

近年はビーチバレーの派手な部分がクローズアップされて、スポーツとしての本質を見失っている傾向があるのではないかと懸念しています。日本のビーチバレーが世界から立ち遅れているいま、基本に返り、スポーツの本質を見つめ直していくことが必要です。

見た目の派手さだけでなく、オリンピックに出たい、アスリートとして上を目指したいという選手が数多く育ってほしいですね」

--- 白鳥選手自身のこれからの活動は？

「具体的なことは決まっていませんが、いままでのパートナーの存在が大きかったので、次のパートナー選びは慎重になりますね。僕はビーチバレーは生涯スポーツだと思っているので、オリンピックを目指すような大会に出なくなったとしても〝引退〟という言葉は使わず、『一線を引く』という言い方になるかもしれません。ローカルな大会に出場している 40 歳、50 歳のプレーヤーはたくさんいます。

どんな形にしろ、これからは僕が経験してきたことをしっかり伝えていきたい」

「平塚ビーチパークみたいにきれいな浜辺にコートが常設されて、ビーチバレーができる環境は、なかなかないんですよ。ボールも貸してもらえるし、みなさんにも手ぶらで来て楽しんでもらいたいですね」

Profile　**白鳥 勝浩**（しらとり　かつひろ）

1976 年 10 月 29 日生まれ (36 歳)　東京都大田区出身
中学からバレーボールを始め、名門、東亜学園高校で春の高校バレー準優勝とインターハイ全国 3 位を経験。東海大学に進学後は、全日本インカレで準優勝と活躍した。卒業後はビーチバレー選手に転向。2002 年よりビーチバレージャパンで 10 連覇を成し遂げる。2008 年北京オリンピックで 9 位、2012 年ロンドンオリンピック代表と 2 大会に連続出場している。湘南ベルマーレ所属　190cm/88kg